

○特發脈疽ノ療法ニオツヘル氏還元血行論ノ應用ノ價值(醫學士八代豊雄
 順天堂醫事研究會雜誌第四九四號)
 ○腹部外科ニノ實驗ニ就テ(高木喜寛、成醫會月報第三八五號)

ラ臨牀家ノ實用ヲ旨トセリ、新藥ノ送迎ニ違ナキ今日、
 本書ノ如キハ實地家ノ參考トシテ便益多カルベシ

中外醫事新報

第八百五十號

大正四年八月二十日刊行

論說

肺「チストマ」ノ發育ニ關スル研究(第三報)

一、肺「チストマ」幼蟲ノ第二中間宿主體內侵入及ビ

謝出路ニ就テノ感想

二、肺「チストマ」幼蟲ノ習性及ビ抵抗力ニ就テ

臺灣總督府新竹醫院長 中 川 幸 庵 述

余曩ニ肺「チストマ」ノ中間宿主ヲ發見シ本蟲ノ被包

囊幼蟲ヲ世ニ紹介スルヤ、之ニ關スル研究實驗各地

ニ起リサシモ暗黒ナリシ本蟲病學ノ甚ダ短時日ニシ

テ闡明解決セラレタルモノ幾多ナルヤヲ知ラズ、誠

ニ愉快ニ堪エザル處ニシテ興學亦盛ナリト云フベシ

余モ亦多忙ナル公務ノ餘暇ヲ以テ本研究ニ從事シツ

ツアリ其成績ヲ得ルニ從ヒ斷片的トシ時々報告シ以

テ他日詳報ヲ記述スル一助トナサント欲ス

一、肺「チストマ」幼蟲ノ第二中間宿主

體內侵入及ビ謝出路ニ就テノ感想

肺「チストマ」ノ有尾幼蟲「チエルカリ
ア」ノ義ナリ(余ガ所謂第十二種

「チエルカリア」ノ第一中間宿主(黑河貝子 *Melania liber-*

2330

tina Gould 及ヒ疣河貝子 *Melania obliquigranosa* Smith

黒河貝子及疣河貝子ノ學名 *Melania tuberculata* ハ岩川理學士ノ鑑定ニ仍ル 竝ニ長河貝子 *Melania tuberculata*

Müll(?) ヲ辭シテ第二中間宿主(余ガ始メテ臺灣蕃地ニ

於テ發見セル澤蟹ノ一種即チ赤蟹 *Theiphusa rubra* Nagaiwa

Kagawa 此迄 *Theiphusa* sp. ト記述セルモノニシテ本種學名ノ判明スル迄記載上ノ便宜ノ爲メ斯ク假ニ稱シオカント欲ス

澤蟹 *Theiphusa bernardi* Aud 或ハ毛蟹ノ一種 *Eriochelir formosa* モー(?) ノ體內ニ侵入寄生シ一定度ノ發育ヲ遂

ゲ之ヲ謝出スルニハ如何ナル徑路ヲトルモノナルカラ考

究スルハ、蓋シ興味深キ問題ナリト雖モ、此等ノ中間宿主

ハ人工飼養池内ニ於テハ長ク生命ヲ保續スル能ハザルガ

故ニ、實驗的ニ之ヲ追究證明スルコトヲ得ザルハ遺憾ナ

リ。先ヅ之ニ關スル感想ヲ披瀝シテ諸賢ノ高教ヲ仰ぎ其

實現センコトヲ希望シテ止マザル處ナリ

(A) 肺「ヂストマ」有尾幼蟲ノ蟹體內ニ侵

入スル徑路

肺「ヂストマ」有尾幼蟲ノ蟹體內ニ侵入スルニ三路アリ

一、口ヨリ

二、鰓片ヲ傳フテ

三、甲殻ヲ穿通シテ

之レナリ

大ナル蟹ハ缺肢ヲ以テ河貝子ヲ捕ヒ之ニ口ニセシモノヲ

見タルコト屢々之レアリ、即チ河貝子類ヲ捕食スルニヨ

リ河貝子體內ニ寄生セル有尾幼蟲ハ介達的ニ蟹ノ胃内ニ

入り強靱ナル胃壁ヲ穿通シテ肝臓ニ達スルモノナラント

ハ考ヘラレザルニアラズ、サレドモ母指頭大ノ子蟹ノ體

内ニ於テモ既ニ多數ノ幼若ナル被包囊幼蟲ノ寄生スルア

リ、此ノ如キ子蟹ガヨク彼ノ形體ニ比シ割合ニ大ナル河

貝子ヲ捕食シ能フカハ疑ハシ、而シテ余ハ多數ノ蟹ヲ捕獲

後多少ノ時間ヲ經過セリ)ノ胃内容物ヲ精シク検査セシ

モノノ有尾幼蟲乃至之ニ類セル形ノモノヲ見出セズ、然

シ乍ラ食物ト共ニ水中ニ遊離セル有尾幼蟲ノ胃内ニ到達

スルコトハ必ズシモ絶無ナリト云フ能ハズ

鰓片ヲ傳フテ有尾幼蟲ハ蟹體內ニ侵入スルコト亦可能ナ

ルガ如シト雖モ、余ハ又多數蟹ノ鰓片ヲ檢シテ未ダ有尾

幼蟲ヲ發見シタルコトナク、而シテ鰓片ニハ幼若ナル被

包囊幼蟲ノ附著スルコトノ甚ダ稀レナルヲ以テ見ルニ、

此道モ亦適當ノ侵入路ニ非ザルガ如シ

甲殻類ニ屬スル蟹ハ硬固ナル外皮即チ甲殻ヲ以テ鎧ヒ體

ヲ防護スルモノナルガ故ニ、幼蟲ノ體外面ヨリ侵入スルナラントハ何人モ思ヒ浮バザルベシ、然ルニ凡テ甲殼類ノ動物ハ發育中屢々脱皮スルモノニシテ其脱皮時ノ甲殼ハ甚ダ軟弱ニシテ皮様ナルコトニ心付タランニハ、彼ノ有尾幼蟲ノ口吸盤ニ存スル銳利ナル刺棘ト體内ニ三對ノ毒腺ヲ有スルハ蓋シ之ヲ穿通侵入スルニ必要缺ク可ラザル武器タラズンバアラザルベカラズ、余ハ今日ノ處肺「チストマ」有尾幼蟲ノ侵入路ハ如此モノナラント想像ス

〔B〕蟹體内ニ於ケル幼蟲ノ發育

蟹體内殊ニ肝臟内ニ於テ被包囊幼蟲ノ幼若ナルモノ多數ニ見ラル、今夏見ル處ノモノハ形稍々小ニシテ、包囊ノ直徑〇・一六乃至〇・一八「ミリメートル」ヲ算ス、本年二月余ガ發見概報ニ記載セルモノハ、〇・二「ミリメートル」ニシテ一、二月ノ頃計測セルモノナリ、之レ幼蟲ノ稍々發育セルモノニシテ今時見ルモノハ蟹體内侵入後多クノ時日ヲ經過セザルモノナルベク從テ其大サモ稍々小ナルモノナルガ如シ

包囊内ニアル幼若蟲ハ比較的大ナル口、腹ノ二吸盤ヲ有ス、兩者共ニ稍々前後ニ壓平セラレ橢圓形ヲ呈スルコ

ト多シ、即チ口吸盤ノ大サハ前後徑〇・〇三五乃至〇・〇四二「ミリメートル」、横徑〇・〇五〇乃至〇・〇五六「ミリメートル」ニシテ、腹吸盤ハ前後徑〇・〇三五乃至〇・〇四二「ミリメートル」、横徑〇・〇五二乃至〇・〇五七「ミリメートル」アリ、排泄囊ハ蠶豆形ヲナシ黑色ノ内容ヲ有シ大ナリ、體ヲ動かストキニハ排泄囊ハ齒蕾葉形ヲナスコトアリ、腸管ハ未ダ發生セズ、包囊ハ「キチン」質ヨリナリ、〇・〇〇五乃至〇・〇〇六「ミリメートル」ノ厚サアリ、幼若ナル包囊モ亦、蟹肝臟ノ一部ヲトリ硝子板間ニ壓平シテ透見スレバ、肉眼的ニモ透明無構造ナル組織間空ノ中心ニ於テ針尖大ノ小白點トシ一乃至二、三個存在スルコトヲ認知シ得ベシ

肝臟其他ノ組織内ニ於テモ侵入直後ノ有尾幼蟲或ハ之ニ類スルモノヲ未ダ發見スル能ハズ、該幼蟲ノ更ニ發達セルモノハ形態稍々大ニシテ腸管ノ起始部ヲ生ゼリ、此ノ如キ發育中途ノモノヲ見ルコト多カラズ

既ニ成熟セル被包囊幼蟲ハソノ大サ直徑〇・二乃至〇・四「ミリメートル」アリ、此頃見ル處ノモノハ其形一般ニ稍小ニシテ〇・二六乃至〇・三八「ミリメートル」アリ、其他

連列スルコトアリ、或ハ包囊ノ數甚ダ多キトキニハ一縱溝内ニ於テ二列ヲナスコトモアリ、鰓片ニ存スル包囊ハ縱溝内ニ固著シ移動スルモノニアラザルガ如ク考ヘタルモ、長時水中ニ養ヒタル蟹ニ就テ檢スルニ、包囊ハ縱溝内ニ於テ殆ンド透明ナル内容液ト共ニ流動轉位スルモノニシテ、鰓縱溝ハ比較的廣濶ナル内腔ヲ有シ包囊ノ運行ニ毫モ支障ヲ呈セザルモノナリ、此縱溝ハ蓋シ鰓片ノ表面中軸ヲ縱走スル血管ニ外ナラズ、肝臓内ニ於テ一定程度ニ發達セル被包囊幼蟲ハ、或ル必要上—恐クハ酸素—血行ヲ介シテ漸次鰓表面ニ現出シ此處ニ於テ發育極度ニ達スレバ縱溝ノ被膜ハ緊張ノ爲メ自ら破裂シテ包囊ハ脫離シ以テ中間宿主體ヲ謝出シ水中ニ入ルモノナリト考フルヲ穩當ナリト信ズ、實際ニ於テ成熟被包囊幼蟲ヲ多數ニ有スル蟹ノ多數ヲ數日間入レ置キタル容器ノ水ヲ沈澱セシメ檢査シタルニ、既ニ水中ニ脱落セシ被包囊幼蟲ノ存在ヲ確メタリ

成熟被包囊幼蟲ハ時トシテ鰓片ノ遊離端ニノミ多ク見ラル、コトアリ、而シテ鰓片ノ遊離端ハ體ノ内方ニ面スルモノナルガ故ニ、一定程度ニ發育セル幼蟲包囊ハ肝臓内ヨ

リ移動シテ鰓遊離端ニトリツキ漸次外方ニ進行スルモノ如ク思惟セシコトアレドモ、前ニ述ベタルガ如ク包囊ハ單ニ鰓片ニ附著スルモノニアラズシテ管腔内ニ介在スルモノナルコトヲ知得シタルニヨリ之ヲ以テ説明スルコト能ハズ

之ヲ要スルニ、蟹ノ脱皮時甲殼ノ軟弱ナルニ乗ジ有尾幼蟲ハ彼口吸盤ニ有スル銳利ナル刺棘ト毒腺ヨリ分泌スル毒液トニヨリ皮殼ヲ溶解穿通シ蟹體內ニ侵入スルモノナルガ如ク考察サル、モ、又消化器ヨリスルコト未ダ全ク否定スベカラザルガ如シ、肝臓内ニ於テ一定程度ノ發育ヲ遂ゲタルトキニハ、恐ク酸素ノ必要上血行ニヨリ鰓表面ニ達シ更ニ發育シ鰓片ノ運動ノ爲メニ自然ニ分離脱落シ水中ニ出デ傳染ノ機會ヲナスモノナラン、勿論幼蟲ヲ寄生スル蟹ノ生食ニ依ル感染之レアリト雖モ、然シ乍ラ之レハ其一部分ニ限ラル、ナルベシ

二、肺「デストマ」被包囊幼蟲ノ習性及ビ

抵抗力ニ就テ

肺「デストマ」被包囊幼蟲ノ抵抗力ヲ知ランコト肺「デストマ」病ノ豫防上甚ダ緊要ノ事項ナリ

○・五「ミリメートル」ノ大ナルモノ、存在スルコト勿論

ナリ、蟲體ハ短大ナルガ故ニ常ニ直位ヲトリ他ノ「ヂスト

マ」幼蟲ノ如ク捲曲セズ、長大ナル黒色ノ排泄囊ノ兩側ニ

ハ迂曲セル透明ノ内容ヲ有スル腸管アリ、口吸盤ノ直径

○・〇七乃至○・〇九「ミリメートル」アリ、口吸盤ニハ一

個ノ銳利ナル劍狀ノ刺棘ヲ備フ其長サ○・〇三「ミリメー

トル」トス、腹吸盤ハ直径○・〇九乃至○・一一「ミリメー

トル」アリ、腹吸盤ハ排泄囊ノ爲メ陰蔽セラレ見エザルコ

ト多シ、蟲體(殊ニ前端ニ於テ著明)ノ外表ニハ短棘ヲ密

生ス皮棘ノ長サ○・〇七乃至○・〇一二「ミリメートル」

ナリ、包囊ノ厚サハ包囊ノ大小ニヨリ差アリ、○・〇一乃

至○・〇一四「ミリメートル」ヲ算ス、蟲體ハ包囊内ニ蠕動

セリ、此ノ如ク成熟セル幼蟲ハ蟹肝臓内ニ於テ見ラル、

コト少ナクシテ、通常三四個多キモ十數個ニ過ギズ、筋

肉内ニモ屢々存在スルモ其數多カラズ、大ナル蟹ノ鰓片

ニハ成熟包囊ハ二、三個乃至十數個乃至數十個附著ス、

又時トシテ頗ル多數ニ寄生スルモノアリ、余ハ一疋ノ蟹

鰓片ヲ檢シ總數九十七個ノ成熟被包囊幼蟲ヲ附著セルモ

ノヲ見タリ

◎成熟被包囊幼蟲ノ蟹體內謝出路

前章ニ於テ、肺「ヂストマ」幼蟲ノ幼若ナルモノハ蟹ノ肝

臓内ニ多ク、成熟セルモノハ鰓片ニ多キコトヲ述ベタリ、

包囊内ニ存スル成熟幼蟲ハ如何ニシテ肝臓ヨリ鰓片ニ到

達スルモノナリヤ之レ亦考究ノ價値アリ

包囊ハ其内ニアル蟲體ノ自動ニ伴ヒ轉々球ヲコロガスガ

如クニ移動シテ位置ヲ轉換スルモノナルコトハ、人工的

ニ包囊ヲ鰓片ヨリ分離シ水ヲ盛レルシヤール中ニ入レ置

キタルモノニ於テ屢々實見スル處ナリ、包囊自己ノ移動

ハ此ノ如クニシテ可能ナリト雖モ、鰓片ヲ選ミ之ニ到達

スルニハ一定ノ要約方法ナカラザルベカラズ、今包囊ノ

鰓片ニ附著スル狀ヲ見ルニ、各鰓片ノ中央ニハ表面ニ於

テ長軸ニ沿フテ走行セル縦溝アリテ包囊之ニ附著スルノ

觀アリト雖モ、精細ニ之ヲ觀察スルニ此縦溝ハ實際上海

キ膜質ヨリナル管腔ニシテ、包囊ハ其管腔内ニ嵌在スル

モノト(今便宜ノ爲メ以下縦溝ト記載セント欲ス)而シテ

包囊ノ存在スル位置ハ一定セズシテ、鰓片縦溝ノ中央

遊離端或ハ附著部何レノ處ニ於テモ見ラル、モノニシ

テ、單ニ一個ナルコトアリ或ハ數個乃至十數個念珠狀ニ

幼若ナル被包囊幼蟲ハ抵抗力薄弱ニシテ、蟹體內ヨリ取出ストキニハ數時間ニシテ死滅ス、幼若ナル被包囊幼蟲ノミヲ分離シ試食セシメタル試驗動物(犬)ハ感染罹病セズ無害ナリト雖モ、之ニ反シ成熟セル被包囊幼蟲ヲ攝食スルトキニハ、其動物ハ必ず毎回感染罹病スルヲ以テ甚ダ危険ノモノナリトス

人工的不自然ニ蟹鰓片ヨリ成熟被包囊幼蟲ヲ分離シテ清水中ニ放置スルニ、幼蟲ハ暫時ニシテ其體ヲ膨大シテ他ノ「デストマ」ニ於テ見ルガ如ク包囊内ニ於テ體ヲ捲曲スルニ至ル、之レヨク發達セル大被囊包幼蟲ニ見ル處ニシテ、小ナルモノニアリテハ一、二日—以上通常ノ形態ヲ保ツ、此ノ如ク水中ニ放置スルコト七十時間(三日)後ニ檢スルニ、幼蟲ハ包囊内ニ於テ捲曲セルモノト排泄囊ノ著シク膨大シ腸管ノ壓小セラレタルモノトノ二種ヲ生ジ蠕動セル蟲體ハ一モ發見スル能ハズ、加之包囊ヲ破ブリ脱出セル幼蟲一、二條アリシモ皆死セルモノナリキ、包囊ヲ鰓片ニ附著セル儘水中ニ致セルモノハ、室溫^{新竹夏}期^{攝氏}ニ於テ二十時間内外ニシテ既ニ幼蟲ノ包囊ヲ突破シ脱出シテ器底ヲ活潑ニ匍匐スルモノ數條アリ、三日後

各鰓片ヲ鏡檢シタルニ

番號	包囊總數	空囊	死蟲囊	生蟲囊	遊離蟲體
一	一六	七	三	五	一
二	六	三	一	二	一
三	七	二	一	四	一
四	三	一	一	二	一
五	三	一	一	二	一
六	七	五	一	二	一
計	四二	一九	六	一七	四
		45.2%	14.3%	40.5%	

右表ノ如クニシテ幼蟲ノ約半數ハ脱囊シ半數ハ尙ホ包囊内ニ於テ生存セリ、少數ノ死蟲囊ノ存スルハ脱囊時ノ障礙其他ノ原因ニヨルモノナルベシ

五日目ニ再檢セルニ、包囊ハ或ハ破裂シテ空包トナリ或ハ蟲體ノ死セルモノ、ミニシテ常形ヲ存シ生命ヲ保ツ蟲體ハ一モ認メザリシ

包囊ヲ水中ニ放置スルトキニハ數時間後ニ於テ既ニ其幼蟲ノ一部ハ包囊ヲ破ブリテ外界ニ突出スルコトハ小林氏ガ肝臟「デストマ」ニ就テ實驗セラレタル處ニシテ、包囊ノ中空ナルモノモ其壁ノ尙ホ殘留スルニヨリ、「デストマ」類ノ包囊ヲ脱出スルハ包囊ノ消化液ニヨリ消化シ終ラザ

ル前ニ於テ蟲體ハ自己ノ運動ニヨリ囊壁ヲ破ブリ突出スルノ事實ハ、肺「ヂストマ」ニ於テモ亦目撃スル處ニシテ冬期低溫(新竹ニ於テハ攝氏一五度内外)ノ際ニハ同一ノ方法ニ於テ水中ニ放置スルコト二週間以上ヲ經過スルモ尙ホ包囊内ノ蟲體ハ生存シ一モ自ラ破囊シテ水中ニ脱出シタルモノナカリキ、幼蟲ノ包囊ヲ脱出スル狀況以上ノ如クナルガ故ニ、肉食或ハ雜食以外ノ動物體内ニモ肺「ヂストマ」ノ侵入シ得ルモノナルコトヲ知得シ、南京鼠其他ノ動物ヲ用ヒ更ニ實驗ヲ反復スベク著手セルニ、恰モ此時ニ於テ安藤氏ハ南京鼠、白鼠「モルモット」、家兎等ニ於ケル感染ヲ報告セラレタルハカクアリ得ベキ事實ニシテ、動物試験上ノ福音ナリト云フベシ、然シ乍ラ此等ノ動物體内ニ於テ幼蟲ノ完全ニ發育成熟シテ母蟲トナリ得ルヤ否ヤハ疑ハシ包囊ヲ破ブリ脱出遊離セル幼蟲體ハ形短大ニシテ靜止時ニハ卵圓形ヲナシ成蟲ノ形態ニ甚ダ類似シ落射光線ニハ淡灰白色ヲ呈シ生活セルモノハ伸縮運動スルガ故ニ不絶種々ニ體形ヲ變ズレドモ、既ニ死セルモノハ伸長ノ體位ヲトリ腸管其他内臟溷濁シテ不鮮明トナル、既ニ包囊ノ大サニ於テモ著シク差等アルガ故ニ脱囊セル幼蟲ノ大モ

亦從テ大小種々アリテ一定セズ、長サ〇・三六乃至〇・五七「ミリメートル」幅〇・一四乃至〇・二五「ミリメートル」アリ、亞兒個保兒ニテ固定セルモノハ縮小シテ長サ〇・三乃至〇・四八「ミリメートル」、幅〇・一八乃至〇・二三「ミリメートル」トナル、前端ノ腹面ニ偏シテ口吸盤アリ、口吸盤ニハ一個ノ銳利ナル刺棘ヲ備フ、腹吸盤ハ口吸盤ヨリモ稍々大ナリ、吸盤ノ大サハ成熟包囊ニ於テ見タルモノニ異ナラズ、口吸盤ニ連續シテ咽頭アリ、食道ハ短カクシテ直ニ腸管ニ移行ス、腸管ハ迂曲セル兩枝ヨリナリ兩端ハ後端ニ近キ所ニ於テ盲端ニ終ル、腸管兩枝間ニハ大ナル排泄囊アリテ黑色ノ内容ヲ有スルアリ、或ハ大半脱出シテ暗色ノ空裂ヲ殘スニ止マルアリ、蟲體ノ表面ニハ短棘密生ス其棘ノ長サハ包囊内ニ於ケルモノニ同ジ脱囊セル幼蟲ハ體ノ造構薄弱ナルガ故ニ、外界ニ於ケル種々ノ理化學的作用ニ對シ抵抗力甚ダ弱シ、(松井氏ノ實驗報告アリ)臺灣新竹ニ於ケル夏期室溫(攝氏三〇度内)外ニ於テハ二十乃至三十時間ニシテ死ス、水流滾々トシテ絶エザル清冷ナル河水中ニ脱離混入セル成熟被包囊幼蟲ハ、溫度ノ關係上自然ニ破囊脱出スルモノニアラザル

ハ理ノ略易キ處ニシテ、終ニ宿主體內ニ侵入スルニハ必ズヤ被包囊ノ状態ニ於テスルモノナルベシ、然シ乍ラ脱囊遊離セル幼蟲ノ飲食物ニ附著シテ人畜ニ侵入スルコトノ有無ヲ知ルハ、豫防上甚ダ必要ナルガ故ニ、脱囊シテ活潑ニ運動シツ、アル幼蟲ヲ用ヒ動物試験ヲ行ヒシガ感染セシムルコト能ハズ

脱囊遊離セル幼蟲ノ抵抗力甚ダ薄弱ナルニ反シ、包囊内ニアル幼蟲ハ頗ル抵抗力強ク、其包囊壁ノ厚キコト未ダ他ノ「デストマ」包囊ニ於テ例ヲ見ザル處ナリ、包囊ノ抵抗ガ強キハ封固ノ際バラフィン或ハチェルロイヂンノ侵入甚ダ困難ナルニ徴シテモ知ラルベシ、今日常ニ吾人が食用トナス調理法ニ對スル抵抗力ヲ檢シタルニ左ノ如シ

一、熱ニ對シテハ蟹ヲ普通食用ニ供スル程度ニ炙リタルモノニ付キ檢スルニ筋蛋白ハ凝固シテ白色トナリ包囊内ノ蟲體ハ稍々淡褐色ヲ呈シ死セリ

包囊ノ附著セル儘、蟹ヲ攝氏五十五度ニ二十分煮タルニ包囊内ノ幼蟲ハ死シ或ハ脱囊遊離シタル後死シタル蟲體ヲ見タリ、生活セルモノハ一モナカリキ

包囊ノミヲ分離シ攝氏四十五度ニ三十分間熱スルモ幼

蟲ハ包囊内ニ於テ活潑ニ運動セリ、五十五度ニ二十分間七十度ニ五分間共ニ死ス

二、食鹽ニ對シテハ一％溶液ニハ長時間生命ヲ保持シ、三％溶液ニ三時間入レ置キタルモノハ蟲體縮小シ運動セズ恰モ死セルガ如キ外觀ヲ呈スレドモ、尙ホ腸管其他内臓ノ構造判明セリ、試ニ之ヲ常水ニ移セバ暫時ニシテ復活蘇生ス、一〇％ノモノニ二時間放置スルモ常水ニ移セバ再ビ蘇生ス

三、醬油ニ包囊ヲ鰓片ニ附著セルマ、三十分間浸漬スルモ尙ホ幼蟲ハヨク運動セリ、一時間後ニハ運動セズ、之ヲ常水ニ移スモ復活スル能ハズ、醬油ニ二時間浸セル大包囊五十個ヲ小猫ニ與ヘ三週間後剖見セシモ蟲體ノ寄生ヲ證明セズ、幼蟲ノ寄生ニ因スル病變ヲモ認メズ

四、食酢ニ包囊ヲ三十分浸漬スルモ尙ホ蠕動スルヲ見ルベク、一時間後ニハ復活蘇生セズ、二時間食酢ニ浸セル包囊五十個ヲ試食セシメタルニ、動物(猫)ハ罹病セザリキ

之ヲ要スルニ、幼蟲ハ氣溫高キ時期ニハ自然ニ破囊脱出

スルモ、遊離セル幼蟲ハ薄弱ニシテ死滅シ易ク、之ニ反シ被包囊内ニアル幼蟲ハ抵抗力頗ル強クシテ食酢、醬油共ニ二時間以上浸漬セルモノハ安全ナリト雖モ、食鹽水ハ濃厚ノモノト雖モ幼蟲ヲ死滅セシムル能ハズ危險ナリ

溫度ニ對シテハ比較的抵抗力弱シト雖モ、彼ノ生蕃人ノナスガ如キ生燒、生煮ノモノハ、尙ホ危險ヲ免カレザルベシ
(大正四年七月十五日稿)

無疹痘瘡ノ追加例及其ノ診斷上ノ注意

醫學士 結 城 玄 通 述

嘗テ本誌七百八十一號ノ紙上ニ於テ、無疹痘瘡ノ三例ヲ報告セシガ、近ク又一例ヲ診ルコトヲ得シカバ茲ニ報告シ併セテ其診斷ニ就テ注意スベキ點ヲ述ベント欲ス

ノ夕、兩上膊部著シク發赤シ、瘙痒ノ感アリ、其ノ他ニ訴フル所ナシ。(患者ハ猩紅熱ノ初期ニアラズヤトノ疑念ト恐怖トニ驅ラレテ來院)

既往症 患者永井某、年三十五歳ノ男、車掌、最近種痘一昨年春、不感

現在症 體格、榮養共ニ佳良ナル頑丈ナル男、一見注意ヲ惹キシハ、兩上膊部殊ニ外面ニ於テ望診及觸診上猩紅

患者生來頑健、渡滿後七ケ年ヲ經過セルモ未ダ著患ニ罹リシ事ナシ、二十歳頃脚氣ヲ患ヒシモ、二ケ月ノ治療ニテ全治再發セズ

熱ノ發疹ト同様ノ疹ヲ認ム、發疹ノ擴域ハ上膊ノ中央部ニ於テ全長ノ約四分ノ二ヲ占ム、而シテ殆ド全周ヲ圍繞ス。但シ疹ノ密度ハ外面密ニシテ内面粗ナリ、發疹個々

本年三月二十九日惡寒發熱、腰痛、倦怠甚ダシカリシモ、二十九日、三十日ノ兩日ハ常ノ如ク執務セリ、三十一日

ニ就キテ觀察スルモ亦全體トシテ觀ルモ、全然猩紅疹ニ類似シ、相違ノ點ヲ見出シ能ハザリキ